みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

19世紀末から20世紀前半にかけてのアイヌ研究とアイヌ資料の収集：ドイツコレクション展示の背景として

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-03-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 岸上, 伸啓 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/00008510

19世紀末から20世紀前半にかけてのアイヌ研究とアイヌ資料の収集
—ドイツコレクション展示の背景として—

岸上伸啓・佐々木史郎
国立民族学博物館

1　アイヌ研究前史

アイヌ民族の文化に関する研究は、日本の人類学あるいは民族学という学問分野の成立の歴史に深く関わっている。

まず、まだ近代的な学問としての人類学や民族学が成立する以前の江戸時代から、日本ではアイヌ文化に対する関心が高かった。当時は現在のアイヌ民族の祖先の大部分が「エゾ」(蝦夷)と呼ばれ、現地では時として非人道的な差別と政治経済的な搾取の対象ともされた。しかし、蝦夷地(現在の北海道、樺太、千島列島に当たる地域)の物産が届けられる本州以南の人々の間では「エゾ」ということばに北方のロマンを感じ、その地域の産物を高値で買い求め、それらが産する土地へのあこがれすら抱いていた。

蝦夷地のアイヌ民族の祖先たちと密接に接し、彼らに関する詳しい情報を持っていたのは、そこを支配した松前藩だった。しかし、彼らはその支配の実態を幕府に知られないようにするために情報を秘していた上に、松前城が火災に遭い、文書類の多くが焼失してしまった。そのために松前景広の『新羅之記録』や松前広長が著した『福山秘府』、『松前志』、『夷酋列像序』などの焼失を免れた、限られた文書類や写本類から彼らの様子を伺うしかない。しかし、それでも松前藩が幕府に提出した絵図(『正保国絵図』や『元禄国絵図』など)をはじめとする様々な提出文書や松前に向かう商人たちからの情報から、アイヌ民族の生活や文化も含む蝦夷地の地理や人々の暮らし、経済活動に関する体系的な著作やエッセイ集なども書かれた。最も初期のアイヌ関係の研究書として知られているのは1720年に書かれた新井白石の『蝦夷志』であるといわれている。また1739年に書かれたとされる坂倉源次郎の『北海随筆』も初期のアイヌ関連の文献として貴重である。

江戸幕府も、蝦夷地を独自に開発しようとした田沼政権の時代からその地域に利害関係を持ち始め、調査官をたびたび派遣するようになった。幕府は1799(寛政11)年から1821(文政4)年と、1855(安政2)年から68(慶応4)年まで蝦夷地を直轄地としており、その間に多くの調査官や行政官を派遣して蝦夷地の情報を集めている。天明、寛政、享和(1780年代から1800年前後)にかけては最上徳内や近藤重蔵、村上島之丞、中村小市郎、高橋次太夫等が、文化・文政時代には間宮林蔵、松田伝十郎等が、幕末から明治初期には松浦武四郎、岡本監輔らが派遣された。彼らはいずれも地理、測量に関する知識と、鋭い観察眼を持っていたことから、アイヌ民族の暮らしぶりを詳細にかつ体系的に記述した。それらは今日でいう民族誌に相当する。いわば彼らは日本におけるアイヌ研究の先駆者である。彼らの報告書は幕府に提出されるだけでなく、一部は刊本として出版され、広く人々の間で読まれた。たとえば最上徳内の『蝦夷草紙』と『蝦夷草紙後篇』、近藤重蔵の『辺要分界図考』、間宮林蔵の『北蝦夷図説』と『東韃紀行』(原本はそれぞれ『北夷分界余話』、『東韃地方紀行』)、松浦武四郎の『廻浦日記』をはじめとする日記類などをあげることができる。「蝦夷錦」(北方経由で日本にもたらされた絹織物)や「アイヌ玉」(アイヌ民族が愛用したガラス玉)などを珍重した当時の人々は、これら出版物を読みながら遠い北の蝦夷地のことを想像していたのである。

他方、天明・寛政期から文化・文政期の最上徳内や間宮林蔵の著作は、フィリップ・フランツ・フォン・シーボルト(Philipp Franz von Siebold)によってドイツ語に翻訳されてその主著『日本』の中で紹介されたことから、彼らのアイヌ文化に関する記録はヨーロッパのアイヌ研究にも影響を与えた。そして、シーボルトやその息子たちもまた、彼らの著作を通じて知ったアイヌ民族の文化についてより深く知ろうとし、日本列島におけるアイヌ文化の位置づけについての議論を展開した。その議論が日本の人類学や民族学の誕生を促し、日本におけるアイヌ文化研究の興隆につながっていく。

2　明治期の人類学とアイヌ研究

日本における人類学研究は、1877(明治10)年のエドワード・S・モース(Edward S. Morse)による大森貝塚の発掘調査に端を発し、1884(明治17)年に坪井正五郎らが「じんるいがくのとも」という研究会を設立した時に組織的な活動が始まった(寺田 1975:5)。その会は、1886(明治19)年に東京人類学会と改称し、1941(昭和16)年には日本人類学会となった。

1880年代から1900年代前半は、日本における人類学の黎明期であったといえる。この黎明期の人類学界において大問題として取り上げられ、当時の人類学を展開させる推進力となったテーマが、「コロボックル・アイヌ論争」であった。この論争のもと、北海道や樺太、千島列島に住むアイヌ民族についての調査が日本人によって行われ、日本の人類学の黎明期においてアイヌ研究は重要な役割を果たしたといえる。また、樺太や千島における調査の実施には、この時期の日本の国力の強大化と領土の帝国主義的拡大、領土内の異民族の同化政策の推進という時代背景があった(坂野 2005)。

一方、欧米人はアイヌを古いタイプの白人種と捉えており、日本列島のもともとの居住者であると同時に、未開の状態のまま残った同胞というきわめて特異な目で見ていたために、欧米各国の民族学博物館がアイヌ資料の収集に積極的に乗り出したという経緯がある(クライナー 1993:26-27)。このため驚くほど多くの欧米人によってアイヌ資料が収集され、欧米の民族学博物館に収蔵されている(小谷・荻原編 2004)。

2　コロボックル論争とアイヌ研究の展開

黎明期の人類学の最大の課題は、石器時代に日本列島に住んでいた人はいったいだれであったか、という問題であった。すなわち、原日本人はだれかという日本人論である。

この問題には、幕末から明治時代にかけて来日した欧米人が関心をもっていた。フィリップ・フランツ・フォン・シーボルトは、アイヌ民族と琉球人との身体的共通性を強調し、日本の原住民はアイヌ民族であったというアイヌ・琉球同系論を主張した。エルヴィン・フォン・ベルツ(Erwin von Bälz)は、当時の日本人を身体的形質から長州型と薩摩型に大別し、前者は大陸からの渡来人、後者は原住の人を代表

坪井正五郎の肖像写真
(提供:東京大学総合研究博物館)
終生、原日本人コロボックル説を主唱した。

していると考えた。ジョン・ミルン(John Milne)は、日本の太古の住民をアイヌ民族と考え、北方地域にはコロボックルが住んでいたと考えた。これらの諸説は、日本の原住民はアイヌであるという説であった。一方、エドワード・S・モースは、後に日本原住民アイヌ説を主張するようになるが、当初は、アイヌ民族には食人の風習がないことや彼らが土器を持っていないことを理由に、大森貝塚人(日本の原住民)は、アイヌ民族ではなくアイヌ以前の住人であるという日本原住民プレ・アイヌ説を唱えていた(梅原・埴原 1982:90-91; 寺田 1975:16-30)。

この石器時代人論争は、日本の人類学界では貝塚に石器や土器を残した石器人と当時の日本人やアイヌ民族との関係を明らかにすることを目的に「コロボックル・アイヌ論争」として展開していった。1884(明治17)年10月17日に帝国大学理科大学で開催された「じんるいがくのとも」の第2回研究会において札幌農学校の第4期生であった渡瀬荘三郎が「札幌近郊ピット其他古跡の事」と題した講演を行い、遺跡の住人はアイヌ民族ではなく、アイヌ民族の伝説に出てくるコロボックルであるという見解を発表した(加藤 2010:107; 渡瀬 1886)。それは会報にも掲載され、「じんるいがくのとも」の中心人物であった坪井正五郎(1886)がその見解に賛意を表明した。これに対し、白井光太郎(1887a、1887b)が反対意見を会報に掲載し、続いてそれに対する反論を坪井(1887a、1887b)が発表した。以降、坪井は、日本原住民=コロボックル説を主唱した。

コロボックル(コロポクウンクル)とは、アイヌ語で「蕗(ふき)の下にいる人」を意味し、アイヌ民族の間に広く伝わっている伝説に出てくる小人をさす。彼らは、アイヌ民族より以前から北海道に分布し、竪穴式住居に住み、土器や石器を製作していたが、アイヌ民族との接触後、ある時期に突然、姿を消したとされている。

3 日本人研究者によるアイヌ研究とアイヌ資料の収集

明治時代後半から大正時代初頭にかけて、日本人研究者によるアイヌ研究は「コロボックル・アイヌ論争」との関連で大きく展開した(寺田 1975)。

1888(明治21)年の夏、帝国大学理科大学助手で人類学者の坪井正五郎は、帝国大学医科大学教授で自然人類学者の小金井良精とともに約2カ月間、北海道の各地を回り、調査を実施するとともに、アイヌ資料の収集を行った。皮肉にもこの調査旅行の結果、坪井と小金井は異なる説を主張するようになる。前者が日本の原住民はコロボックル(非アイヌ)であると主張し、後者はアイヌ民族こそ日本の原住民であると主張した。ここでは、以降、前者をコロボックル説、後者をアイヌ説と便宜的に呼んでおきたい。この論争は、坪井正五郎がロシアのサンクトペテルブルグで客死する1913(大正2)年まで続いた。

坪井は、1889(明治22)年にイギリスに留学した。同年、小金井は、約3カ月にわたって北海道、樺太、色丹島で、遺跡発掘やアイヌ民族の身体計測、民族学調査、アイヌ資料の収集を実施した。この調査に基づき「北海道石器時代の遺跡について」(1889)を発表した。同論文において、北海道、色丹島および樺太のアイヌの言語、住居、入れ墨などの慣習、伝説を報告し、これらの人々が同一種であると表明している。さらに推考し、同地域の石器時代の遺跡はアイヌ民族のものであると結論づけている(小金井 1889;寺田 1975:88-89; 北構 1985:3)。

1892(明治25)年に坪井はイギリスから帰国し、帝国大学理科大学教授となった。翌年の9月には、正式に日本初の人類学講座が設けられた(寺田 1975:67)。その後、明治30年代後半(1900年代初頭)にコロボックル・アイヌ論争は、決着がつかぬまま、盛り上がりの頂点を極めた。

1899(明治32)年は、コロボックル・アイヌ論争にとって重要な年になった。1875(明治8)年に千島樺太交換条約によって樺太全域がロシア領に、千島列島全域が日本領となっていたが、1884(明治17)年に明治政府は国境防衛政策のため千島列島北半部に居住していたアイヌ民族97名を色丹島に強制移住させた。千島列島の調査とそこへの入植を構想していた報効義会の郡司成忠大尉の要請を受け、1899(明治32)年に鳥居龍蔵は東京帝国大学から人類学調査のために北千島への出張を命じられた。鳥居は千島列島のシュムシュ島などの調査を実施し、千島アイヌは最近まで石器や土器を製作し、竪穴式住居に住んでいたことを明らかにした。また、帰りに色丹島に移住させられていたアイヌ民族を訪ね、身体計測や言語調査、民族学的調査を実施するとともに、アイヌ資料を収集した(大塚 1993a; 佐々木高明 1993:10)。鳥居は、20世紀以前のアイヌ民族は、北海道本島や国後・択捉両島に住む北海道アイヌ、樺太南半部に住む樺太アイヌ、千島列島のウルップ島からシュムシュ島までの島嶼地帯に住む千島アイヌからなると指摘している。この調査の成果は、1903(明治36)年に和文で、1919(大正8)年に仏文で出版されている(鳥居 1903; Torii 1919)。この調査によって鳥居は千島アイヌの貴重な資料を収集した一方、その成果は、近年までアイヌ民族が竪穴式住居に住み、石器や土器を製作していたことを明らかにしたため、坪井のコロボックル説に大きな打撃を与えた。しかし、坪井はコロボックル説を取り下げることはなく、その後も主張し続けた。

日露戦争の結果、日本は1905(明治38)年に樺太南部を領有することになった。そして1907(明治40)年には、日本領となった樺太南部で坪井正五郎らは調査を開始した(小西 2000、2004)。第1回目の調査は、1907(明治40)年7月から10月にかけて東京人類学会(東京帝国大学理科大学人類学教室)の坪井が、石田収蔵と野中完一を伴い、樺太の地にコロボックル説を確認することを目的として南部域の東西両岸で調査を実施した。坪井と石田は東京帝国大学による派遣であったが、野中は二条基弘が主宰する二条家銅駄坊陳列所による派遣であった(小西 2000: 9; 佐々木 2000: 106)。この調査は当初の目的であるコロボックル説の確認を

することはできなかったが、樺太におけるアイヌやニヴフ、ウイルタの民族学調査の先駆けとなるとともに、それらの民族に関係する多数の資料を収集した(小西 2004)。

この樺太調査は、その後、同人類学教室の石田収蔵によって、第2回が1909年(明治42)年7月から9月にかけて、第3回が1912(明治45・大正元)年7月から9月にかけて、第4回が1917(大正6)年7月から9月にかけて、そして第5回が1939(昭和14)年7月から9月にかけて実施された。第2回目の調査時には、樺太西海岸では交通の便の発達や漁場の開発が行われたことによって、アイヌ集落の衰亡が著しいことを報告している(小西 2000、2004)。石田は、アイヌ民族のみならず、タライカ周辺を中心にウイルタやニヴフの民族学的資料を収集した(小西 2004)。

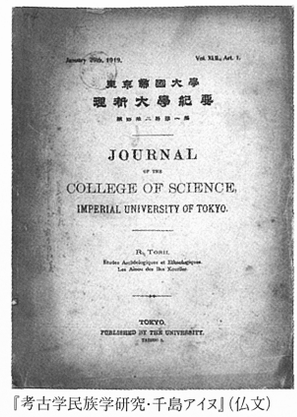
東京帝国大学人類学教室の鳥居は、樺太調査を全3回、実施している。鳥居は1912(明治45)年に樺太庁の援助で樺太南部のアイヌ、ウイルタ、ニヴフの民族学的調査を実施するとともに、彼らの生活用具を収集した。1919(大正8)年にはシベリア出兵によって日本軍が占領したシベリア東部からアムール川流域で調査を行い、樺太北部まで足を伸ばした。1921(大正10)年には、前年に起きた尼港事件(アムール川河口近くのニコラエフスクで、日本の軍人と民間人がパルチザンの一派に虐殺された事件)に対する損害賠償を求めて日本軍が樺太北部を占領するという機会を利用して、北樺太の調査を実施した。この第3回目の調査によって鳥居は、トゥイミ川流域のニヴフの動向を報告するとともに、民族学資料を収集した(大塚 1993b; 小西 2004: 122-123)。

以上のように、コロボックル・アイヌ論争を中心に黎明期の人類学は展開した。しかし1913(大正2)年の坪井の死をもってコロボックル説は消滅し、大正期にはアイヌ説が主流になる。その後、アイヌ説も否定されるが、論争の中でアイヌ研究は黎明期の人類学の原動力として展開されていったということができよう。また、総合人類学者・坪井の死後、生物系の人類学と民族学、考古学がそれぞれ独自の研究会や学会を組織し、相互に独立した道を歩み始めることになる(末成 1996)。

このような一連の調査によって収集されたアイヌの民族学的資料は、東京大学理学部人類学教室によって保管されていたが、1975(昭和50)年に国立民族学博物館が創設されるにあたって、前者から後者へと移管された。現在、国立民族学博物館が所蔵している旧東京(東京帝国)大学理学部資料は、総計で6,181点にのぼるが、そのうちアイヌあるいは樺太の先住民(ウイルタやニヴフ)の資料は916点である。その内訳は、北海道のアイヌ資料501点、千島アイヌ資料81点、樺太資料(アイヌ以外にウイルタやニヴフも含む)334点である(宇野 2000:24; 佐々木 2008:241)。この中で、千島アイヌの資料は1899(明治32)年に鳥居が収集したものであり、樺太アイヌの資料は1907(明治40)年に坪井が、1912(明治45)年と1921(大正10)年に鳥居が収集したものである(佐々木 2008: 241)。

千島列島資料については、開拓使が1875(明治8)年の千島巡行時に収集した資料や馬場脩が収集した民具、馬場脩が1930年代に発掘した遺物からなる総計350点あまりの資料が市立函館博物館に収蔵されている。この中には、露米会社によってコディアック島から強制的に連れてこられた先住民の仮面や3人乗りバイダルカ(皮舟)なども含まれている(大矢 2009)。また、開拓使収集の資料は北海道大学北方生物圏フィールド科学センター植物園の中の博物館にも収蔵されている(鳥皮衣や楽器パララィキなど)。

鳥居龍蔵の肖像写真
(提供:東京大学総合研究博物館)
千島アイヌ調査によって、原日本人コロボックル説の反証事例を提示した。



東京帝國大學
理科大學紀要
JOURNAL
OF THE
COLLEGE OF SCIENCE,
IMPERIAL UNIVERSITY OF TOKYO.
TOKYO.

『考古学民族学研究・千島アイヌ』(仏文)

1900年代前半のアイヌ研究において忘れてはならないものに、アイヌ語研究がある。その代表が言語学者である金田一京助の研究である。1905(明治38)年にジョン・バチェラー(John Batchelor)の『アイヌ・英・和辞典及アイヌ語文典』(第2版)を読んだ金田一は、その内容に不満を持ち、アイヌ語研究を志すようになった。1906(明治39)年に、大学3年生の金田一は北海道日高の平取のアイヌ古老、平村カネトクから英雄叙事詩「ユーカラ」を採集した。そのユーカラを解明するためにアイヌ語の古形を残していると考えられる樺太アイヌの言語を調査すべく、1907(明治40)年に樺太の東海岸オチョポッカ集落(落帆)を訪れた。彼はそこで、樺太アイヌの言語を習得するとともに、樺太アイヌの英雄叙事詩「ハウキ」を筆録した。これが彼のアイヌ語研究の始まりであった。ハウキに使われている古語を研究し、1914(大正3年)年には『北蝦夷古謡遺篇』を公刊した。その後、彼はユーカラ研究を進め、それが散文の語り物ではなく、韻文の謡い物であることを確認するなど(金田一 1931)、アイヌ語研究の基礎を作りあげるとともに、後進に多大の影響を及ぼした(村崎 1988)。

4　欧米人によるアイヌ研究とアイヌ資料の収集

1860年代以降、さまざまな外国人がアイヌ民族に関心を持ち、アイヌ資料を収集した結果、欧米の民族学博物館には多数のアイヌ資料が収蔵されている(荻原 2004; クライナー 1993、2004;小谷 2004; 小谷編 1993; 小谷・荻原編 2004)。ここでは1860年代半ばから1900年代前半にかけてアイヌ文化を研究したり、アイヌ資料を収集した外国人について紹介する。

ドイツ帝国(プロシア)の初代駐日領事であったマックス・フォン・ブラント(Max von Brandts)は、一時期、北海道をドイツ帝国の植民地にしようと考えていた。このため、1865(慶応元)年に渡島半島を視察し、約50点のアイヌ資料を収集した(クライナー 1993: 27)。

明治時代になるとお雇い外国人教師や宣教師、医師らがアイヌ資料を収集するようになった。1877(明治10)年から1880(明治13)年にかけて帝国大学医科大学で医学を教えたハンス・ギールケ(Hans Gierke)は、在任中に茶碗や杓子、マキリ(小刀)、煙管など65点あまりの樺太アイヌ資料を収集している。地質学者のジョン・ミ

ルンは、1878（明治11）年に北海道から千島にかけて旅行しながら、遺跡や遺物の調査を行った。すでにのべたようにミルンは日本の原住民をアイヌと考え、コロボックルは北方に住んでいたと考えていた（Milne 1882、1893; 吉岡・長谷部 1993）。

フィリップ・フランツ・フォン・シーボルトの次男ハインリヒ・フォン・シーボルト（Heinrich von Sieboold）は、オーストリアの役人として来日し、1878（明治11）年に北海道の日高の沙流川流域で調査を行い、アイヌ資料を収集した。彼は、父親同様、日本の原住民はアイヌ民族であると主張した。

ゲオルク・シュレージンガー（Georg Schlesinger）は、1879（明治12）年に北海道を旅し、札幌周辺の対雁で樺太から移住してきたアイヌ民族から耳飾りやナイフ、女性の守り紐などを収集した（オェルシュレーガー 1993: 33）。ドイツ・ケルン出身の民族学者ヴィルヘルム・ヨースト（Wilhelm Joest）は、1880（明治13）年から1881（明治14）年にかけて北海道を調査し、弓矢や仕掛弓、マレㇰ（鉤）、矢筒、イクパスイ、首飾りなど約155点のアイヌ資料を収集した（クライナー 1993: 28; オェルシュレーガー 1993: 32）。

1881（明治14）年から1905（明治38）年まで日本に滞在し、帝国大学医科大学およびその後身である東京帝国大学医学部で外科の指導にあたったユリウス・スクリーバー（Julius Scriba）や、1877（明治10）年から1881（明治14）年まで日本に滞在し、京都府立医科大学の創設に関わったハインリッヒ・B・ショイベ（Henrich Botho Scheube）は、北海道においてアイヌ民族の調査やアイヌ資料の収集を行った（クライナー 1987: 434）。

英国人の宣教師ジョン・バチェラーは、1877（明治10）年に英国聖公会の宣教師として来日し、札幌を中心にキリスト教の布教活動に従事するとともに、アイヌ民族を対象とした教育活動や医療活動など慈善事業を展開した。彼はアイヌ文化やアイヌ語の研究者でもあり、アイヌ民族の言語や宗教、伝承、歴史について著作を残した（Batchelor 1882、1892、1901; バチェラー 1889）。彼は外国人によるアイヌ調査や資料の収集において、アイヌ集落への紹介者や仲介者として重要な役割を果たし、1890年代半ばから第1次世界大戦が始まった1914（大正3）年ごろまで、アイヌ文化研究とアイヌ資料収集のための欧米人の情報センター的な存在であった（小谷 1993: 72）。

ポーランド人の民族学者ブロニスワフ・ピウスツキ（Bronisław Piłsudski）は、ロシア皇帝アレクサンドル3世の暗殺計画に関わったことで逮捕され、樺太流刑15年の判決を受け、1887（明治20）年に樺太北部のトゥイミ川上流のルィコフスコエ村に居住した。そして周辺に住むニヴフの調査を開始した。1896（明治29）年にコルサコフ（大泊）に気象観測所が設立されると勤務を命じられ、このころにアイヌ民族と接触を始めた。その後は、1903（明治36）年から1905（明治38）年にかけてロシア科学アカデミーの委託でサハリン調査に従事した。この時に、彼はエジソン式蠟管蓄音機でアイヌ語の録音を行った。さらに1903（明治36）年夏には、ポーランド人の民族学者W.シェロシェフスキ（Sieroszewski）とともに北海道の白老と平取でアイヌ調査を実施している（和田 1999: Vii）。白老では、ピウスツキはなぞなぞや歌、寓話、伝説の類を収集し、シェロシェフスキはスケッチや写真・映画撮影、家系・経済調査に従事した。そしてその後、バチェラーの紹介で平取に入ったという（吉上 1987: 87）。ピウスツキは、特に樺太アイヌの言語やシャーマニズム、伝承などについて多大の業績を残した（ピウスツキ 1906; Piłsudski 1909a、1909b、1912ほか）。後年、日本人やポーランド人による共同研究によってピウスツキの残した蠟管蓄音機で録音されたアイヌ語の復元やその研究は、樺太アイヌ研究の発展における大きな成果のひとつである（加藤・小谷編 1987）。

ロミン・ヒッチコック（Romyn Hitchcock）は、1884（明治17）年から1899（明治32）年まで米国のスミソニアン協会国立博物館で学芸員の任にあったが、1887（明治20）年から1889（明治22）年にかけて大阪医学校（現在の大阪大学の前身）の教授として教鞭に立った。日本滞在中の1888（明治21）年に北海道東部と南千島で調査を行い、写真記録を残すとともにアイヌ資料の収集を行った。彼はまた、札幌農学校関係者の協力を得て古物商から江別市対雁の樺太アイヌ資料を手に入れた。彼の収集物は米国スミソニアン協会の自然史博物館に収蔵されている（小谷 2004:17; ヒッチコック 1985:209-231）。ヒッチコックによる研究の重要性は、千島アイヌや道東のオホーツク沿岸のアイヌに関する調査を実施し、白老や平取など北海道南西部のアイヌ文化とは違いがあることを示し、アイヌ文化の地域的多様性を指摘したことであるといえよう（Hitchock 1892a、1892b; 北構 1985: 5; ヒッチコック 1985）。

日本の警察の父といわれているヴィルヘルム・ヘーン（Wilhelm Höhn）は、1893（明治26）年に北海道を旅行し、おもに江別市対雁でアイヌ資料を収集した。1876（明治9）年から1905（明治38）年まで東京帝国大学医学部で内科の教授を務めたエルヴィン・フォン・ベルツは、1898（明治31）年に北海道で調査をし、煙草入れや短剣、マキリ（小刀）、イクパスイ、首飾りなど約95点のアイヌ資料を収集している。パウル・エーレンライヒ（Paul Ehrenreich）は、1892（明治25）年から翌年にかけてインドと東アジアを旅した。その際、ゴザや衣類、織機、イクパスイ、煙草入れ、矢筒、弓矢などのアイヌ資料を収集している（オェルシュレーガー 1993:32-33）。

1891（明治24）年に来日した英国人医師ニール・ゴードン・マンロー（Neil Gordon Munro）は、1898（明治31）年に北海道各地のアイヌ集落を訪問し、以降、数度の北海道旅行を行っている。1908（明治41）年にエディンバラ大学に学位論文を提出するためにスコットランドに一時的に帰った。この一時帰国中に王立スコットランド博物館から正式な通信員に任命され、1914（大正3）年まで北海道で収集したアイヌ資料など2000点以上を博物館へ送っている（手塚 2002: 20）。1932（昭和7）年には、北海道（平取村二風谷）に移り住み、おもにアイヌを対象に無料診療を開始した。約10年の活動の後、1942（昭和17）年に逝去した。北海道在住時には、二風谷におけるイオマンテ（クマ送り儀礼）やウエポタラ（悪魔払い）、チセノミ（新築祝い）についての記録映画を制作するとともに、沙流

川流域のアイヌの社会生活や宗教、儀式、社会組織に関する調査を実施し、その成果を出版している(Munro 1962; 出村 2006)。

医学者のハイラム・M・ヒラー(Hiram M. Hiller)は、1900(明治33)年に北海道の沙流川流域、噴火湾、室蘭から苫小牧までの胆振海岸をまわり、アイヌ資料を収集した。彼の収集物はペンシルベニア大学考古人類学博物館に収蔵されている。同年夏に東京帝国大学臨海実験所に滞在していた魚類学者バシュフォード・ディーン(Bashford Dean)も北海道の噴火湾北岸や胆振海岸のアイヌ村落を訪ね、約240点のアイヌ資料を収集している。彼の収集物はアメリカ自然史博物館に所蔵されている(小谷 2004)。

シカゴ大学の人類学者フレデリック・スター(Frederick Starr)は、米国ミズリー州セントルイスで開催された「ルイジアナ植民地購入百周年記念万国博覧会」(略称、セントルイス万博)の準備と打ち合わせのために、開催年である1904(明治37)年に来日し、北海道を訪ねた(スター 1997)。彼は、セントルイス万博に参加するアイヌ民族を探すことや展示用の家屋を購入し米国に輸送することを第一の目的としていたが、バチェラーの仲介で下平取や上平取、二風谷、白老などを訪問し、アイヌ資料を収集している。彼は、セントルイスに行くアイヌ民族9名を見つけ出すとともに、白老のアイヌ家屋2軒、さらに約240点のアイヌ資料を収集した。スターは、1910(明治43)年1月と3月にも北海道を訪れ、アイヌ資料を収集している。同年1月には十勝地方の芽室を訪問し、「キツネ送り」や「クマ送り」の儀礼を観察するとともに、約40点のアイヌ資料を収集している。同年の3月には平取を訪問し、約40点のアイヌ資料を収集している。彼の収集物はおもに米国のブルックリン美術館やベロイト大学附属ローガン人類学博物館に収蔵されている(小谷 1993:67、2004:18)。スターは、1904(明治37)年からの6年間に、平取のアイヌの住居が日本風に改築され、日本式家屋が定着していった変化を記録に残している(小谷 1993b、1994)。ブルックリン博物館の学芸員であったスチュアート・キュリン(Stewart Culin)は、1912(明治45)年夏に北海道と南千島、仙台を訪問し、約500点のアイヌ資料を購入している(小谷 1993a:69)。

異色なアイヌ資料の収集者として、ハンブルグに拠点を置くウムラウフ商社(Handelshaus Umlauff)があげられる。ウムラウフ商社は、1906(明治39)年と1907(明治40)年に総計707点のアイヌ資料を入手している。資料の半分は北海道アイヌ、残りの半分は樺太アイヌのもので、収集地や収集年について詳細な記録が残っており、学術資料としての価値が高い。それらはライプツィヒ民族学博物館などヨーロッパの博物館に販売された(クライナー 1993:28)。この入手先は判明していないが、1884(明治17年)年10月から1885年(明治18)年1月にかけて樺太周辺に到来したノルウェー人船長アドリアン・ヤコブセン(Adrian Jacobsen)が関係しているものと推測されている(クライナー 2004:103)。

ドイツのブレーメンにある海外博物館の初代館長フーゴ・シャウインスラント(Hugo Schauinsland)は、1913(大正2)年から1914(大正3年)にかけて行った日本での調査の合間に約120点のアイヌ資料を収集している(クライナー 1993:28)。ハンガリー出身の民族学者ベネディクト・バロヒ・フォン・バラトシュ(Benedikt Balogh von Baraàtos)は、ハンブルグ市立民族学博物館の支援を受けて、1914(大正3)年から翌年にかけてシベリア東部や樺太、北海道で調査を行うとともに、約820点のアイヌ資料を収集している(クライナー 2004:104)。

ロシア人の民族学者W.ヴァシリエフ(Vasil'ev)は、1912(明治45・大正元)年夏に北海道の沙流川流域にある平取と二風谷および樺太島の東西海岸で約830点のアイヌ資料を、サンクトペテルブルグのロシア民族学博物館のために収集した(荻原 2004)。荻原らの調査によって、「ロシア科学アカデミー・ピョートル大帝記念人類学民族学博物館」(サンクトペテルブルグ市)に約1890点、「ロシア民族学博物館」(サンクトペテルブルグ市)に約2600点、「グロジェコフ記念ハバロフスク地方郷土博物館」(ハバロフスク市)に約24点、「V.K.アルセーニエフ記念沿海地方郷土博物館」(ウラジオストーク市)に約71点、「サハリン州郷土博物館」(ユジノサハリンスク市)に約460点のアイヌ資料が、そして「オムスク造形美術館」(西シベリアのオムスク市)に平澤屏山の12葉のアイヌ絵が存在していることが明らかになっている(荻原・古原編 2002)。ロシアのアイヌ資料の特徴は、1800年代末から1900年代前半にかけて収集された樺太資料が多く、収集者や収集地、収集年代が明らかである上に、あらゆる生活領域を網羅した物質文化である(荻原 2004:32)

1919(大正8)年には、北海道と樺太を訪れたジョージュ・モンタンドン(George Montandon)が約115点のアイヌ資料をフランスに持ち帰っている。それらは1900(明治33)年以前にポール・ラベー(Paul Labbé)が集めた約60点のアイヌ資料とともにパリにある旧人類学博物館に収蔵されている(クライナー 1987:445)。そして、蠣崎波響の『夷酋列像』のうちの11枚がブザンソン市立美術館にある。流出年は不明だが恐らく幕末から明治の間のことと考えられている。

以上のように1800年代後半から1900年代前半にかけて多くのさまざまな欧米人が北海道アイヌや千島アイヌ、樺太アイヌについて調査を行うとともに、彼らの資料を収集した。そして収集品は、欧米の民族学博物館に収蔵されている(小谷・荻原編 2004)。

5 19世紀末から20世紀初頭に収集されたアイヌ資料とライプツィヒ民族学博物館のアイヌ資料

日本の人類学の黎明期の中心的な課題は、日本列島で石器や土器を使用していた原住者はアイヌ民族であるか、あるいはコロボックルであるかを検証することにあった。このため、小金井良精や坪井正五郎、石田収蔵、鳥居龍蔵らは北海道や樺太、千島で集中的に現地調査や発掘調査を行うとともに、アイヌ資料を収集した。このように日本の人類学の成立過程において、アイヌ研究が果たした役割は大きい。一方、現在の視点から一連の調査を見ると、アイヌ研究の負の側面も指摘せざるを得ない。鳥居らの千島や樺太での民族学調査の経緯を見ると、彼らの調査が明らかに日本の植民地拡大と連動していることが分かる。また、坪井や小金井がアイヌに実施

した身体計測や頭骨の収集には、支配側の国家を背後にした研究者による少数先住民族に対する一方的な収奪的側面があったことも看過できない(坂野 2005)。

一方、欧米人は、江戸時代末ごろから日本文化やアイヌ文化に興味を示し、民族学資料を収集してきた。欧米人は、アイヌ民族を古いタイプの白人種と考えた。さらにアイヌ民族は、日本列島のもとの居住者であったが、大陸から渡来した集団によって北海道に追い込まれ、その結果、未開の状態のまま残ったと考えた。すでに述べたように、欧米においてアイヌ民族は神秘的な同胞であり、欧米各国の博物館は彼らの資料の収集に積極的に乗り出した(クライナー 1993:26-27)。

国内外のアイヌ資料について総合的な調査を実施した小谷凱宣は、国外アイヌ資料について3つの特徴を指摘している。第1に、北海道、千島、樺太のアイヌ資料が存在している。第2に、それらの資料の収集が、アイヌ文化が大きな変化を遂げていた1890年前後から1912年ごろまでの約25年間に集中している。第3に、これらの資料は、19世紀末から20世紀初頭にかけての北海道と樺太におけるアイヌ文化の地域的な多様性を解明する可能性を秘めている(小谷 2004: 17)。一方、19世紀末から20世紀初頭にかけて収集された、国内にある北海道アイヌ資料については、詳細な情報が残っていないものが多い。しかも日本人によるアイヌ資料の収集はアイヌ民族の村落生活が崩壊した後の1930年前後から開始されたため、アイヌ文化の地域差や時代差を解明するに十分な資料が存在していないという(小谷 2004: 23)。その例外は、北海道大学植物園に収蔵されている明治10年代に開拓使が収集した資料と、国立民族学博物館に収蔵されている樺太や千島において坪井や石田、鳥居らが収集した旧東京大学理学部資料である。

今回、日本に里帰りし、公開されるライプツィヒ民族学博物館とドレスデン民族学博物館のアイヌ資料は、旧東京大学理学部資料とほぼ同じ時期に収集されたものである。最後にライプツィヒ民族学博物館のアイヌ資料について説明したい。同博物館には約700点のアイヌ資料が所蔵されている。これらの資料の直接の収集者は、東京帝国大学の小金井良精、京都府立医大学の創設者のひとりであるハインリッヒ・ボート・ショイベ、横浜市に本部があったドイツ東アジア学術協会、ハンブルグ市に拠点のあったウムラウフ商社、B.ピウスツキとW.シェロシェフスキらであった。また、同博物館のパトロンであった地理学者のハンス・メイヤー(Hans Meyer)が多数のアイヌ資料を購入し、寄贈している。なお、メイヤーの寄贈資料の収集者は、A.V.グリゴリエ(Grigoryer)やI.S.ポリャコフ(Polyakov)、B.ピウスツキ、W.シェロシェフスキであった(トライデ 1993: 35-37; 小谷ほか 2004: 370-371)。

ライプツィヒ民族学博物館ら欧米の博物館に所蔵されている、19世紀末から20世紀初頭にかけて収集された北海道や千島、樺太のアイヌ資料を、同時期に収集された旧東京大学理学部資料と比較検討すれば、当時のアイヌ文化の地域的多様性を把握し、解明することができるという点で、それらの資料は学術的にきわめて重要である。さらに、それらは、現在のアイヌ民族の工芸家が参考にし、かつての器物を復元したり、新たな工芸を創り出したりするための源泉となりうる点で、現代的な意義を持つといえよう。

引用参照文献

(和文)

宇野文男

2000『みんぱくコレクション』(みんぱく発見②)大阪:千里文化財団。

梅原　猛・埴原和郎

1982『アイヌは原日本人か』(小学館創造選書)東京:小学館。

オェルシュレーガー、ハンス=ディーダ

1993「ベルリン国立民族学博物館におけるアイヌ・コレクションについて」東京国立博物館編『アイヌの工芸』pp31-34. 東京:東京国立博物館。

大塚和義

1993a「鳥居龍蔵の千島(クリール)アイヌ調査」佐々木高明編『民族学の先覚者—鳥居龍蔵の見たアジア』pp.26-30. 大阪:千里文化財団。

1993b「鳥居龍蔵のサハリン(樺太)とアムール(黒龍江)の調査」佐々木高明編『民族学の先覚者—鳥居龍蔵の見たアジア』pp.32-36. 大阪:千里文化財団。

大矢京右

2009「市立函館博物館所蔵千島関連資料」北海道立北方民族博物館編『第24回特別展 環北太平洋の文化IV 千島列島に生きる アイヌと日露・交流の記憶』pp.21-23. 網走:北海道立民族博物館。

荻原眞子

2004「ロシアのアイヌ文化財調査について」小谷凱宣編『海外のアイヌ文化財:現状と歴史』(第17回「大学と科学」公開シンポジウム発表収録集)pp.24-33. 名古屋:南山大学人類学研究所。

荻原眞子・古原敏弘編

2002『ロシア・アイヌ資料の総合研究—極東博物館のアイヌ資料を中心として—』(文部科学省科学研究費補助金2000-2001年度(基盤A-1)研究成果報告書)千葉:千葉大学文学部。

加藤九祚・小谷凱宣編

1987『ピウスツキ資料と北方諸民族文化の研究』(国立民族学博物館研究報告別冊5号)大阪:国立民族学博物館。

加藤博文

2010「解説 アイヌ研究において考古学の果たすべき役割とは何か」北海道大学アイヌ・先住民研究センター編『アイヌ研究の現在と未来』pp.100-113. 札幌:北海道大学出版会。

北構保男

1985「訳者序」R・ヒッチゴック(北構保男訳)『アイヌ人とその文化—明治中期のアイヌの村から』(世界の民族誌I)pp.1-6. 東京:六興出版。

金田一京助

1914『北蝦夷古謡遺篇』東京:郷土研究社。

1931『アイヌ叙事詩ユーカラの研究』東京:平凡社。

クライナー、ヨーゼフ

1993「西洋のアイヌ観の形成—ヨーロッパにおけるアイヌ民族文化の研究とアイヌ関係コレクションの歴史について」東京国立博物館編『アイヌの工芸』pp.25-30. 東京:東京博物館。

1996「日本民族学・文化人類学の歴史」ヨーゼフ・クライナー編『日本民族学の現在』pp.3-8. 東京:新曜社。

2004「ヨーロッパ思想史とアイヌ観、アイヌ研究、アイヌ・コレクションの形成」小谷凱宣編『海外のアイヌ文化財:現状と歴史』(第17回「大学と科学」公開シンポジウム発表収録集)pp.94-106. 名古屋:南山大学人類学研究所。

小金井良精

1889「北海道石器時代の遺跡について」『東京人類学会雑誌』5(44):2-7と5(45):34-49。

小谷凱宣

1993a「ジョン・バチェラーのアイヌ・コレクション収集における貢献」小谷凱宣編『在米アイヌ関係資料の民族学的研究』(文部省科学研究費補助金(1990−1992年度)国際学術研究(学術調査)研究成果報告書)pp.62-74. 名古屋:名古屋大学教養部。

1993b「フレデリック・スターのアイヌ関係コレクション」小谷凱宣編『在米アイヌ関係資料の民族学的研究』(文部省科学研究費補助金(1990−1992年度)国際学術研究(学術調査)研究成果報告書)pp.75-88. 名古屋:名古屋大学教養部。

2004「明治時代のアイヌ・コレクション収集史再考—国外アイヌ・コレクションの調査結果から—」小谷凱宣編『海外アイヌ資料にもとづくアイヌ文化の地域差・時代差に関する研究』(文部科学省科学研究費補助金(2001〜2003年度)基盤研究(B)(1)研究成果報告書)pp.13-27. 名古屋:南山大学人類学研究所。

小谷凱宣ほか

2004「5」ライプチヒ民族学博物館アイヌ・コレクション一覧」小谷凱宣・荻原眞子編『海外アイヌ・コレクション総目録』(文部科学省科学研究費補助金(2001〜2003年度)基盤研究(B)(2)研究成果報告書)pp.369-400. 名古屋:南山大学人類学研究所。

小西雅徳

2000「序論 石田収蔵—謎の人類学者の生涯と板橋」小西雅徳編『特別展石田収蔵—謎の人類学者の生涯と板橋』pp.6-14. 東京:板橋区立郷土資料館。

2004「東京人類学会と樺太調査行」(財)アイヌ文化振興・研究推進機構編『樺太アイヌ民族誌—工芸に見る技と匠』pp.118-123. 札幌:(財)アイヌ文化振興・研究推進機構。

坂野 徹

2005『帝国日本と人類学者 1884-1952』東京:勁草書房。

佐々木高明

1993「鳥居龍蔵のアジア研究—その足跡をたずねて」佐々木高明編『民族学の先覚者—鳥居龍蔵の見たアジア』pp.8-14. 大阪:千里文化財団。

佐々木史郎

2008「国立民族学博物館所蔵のアイヌ資料—旧東京大学理学部人類学教室資料—」佐々木史郎・古原敏弘・小谷凱宣編『北海道内の主要アイヌ資料の再検討』(日本学術振興会科学研究費補助金(2005〜2007年度)基盤研究(B)研究成果報告書)pp.241-242. 大阪:国立民族学博物館。

佐々木利和

2000「隠れたる先達石田収蔵先生」小西雅徳編『特別展 石田収蔵 —謎の人類学者の生涯と板橋』pp.106-112. 東京:板橋区立郷土資料館。白井光太郎(M. S.)

1887a「コロボックル果シテ北海道ニ住ミシヤ」『東京人類学会報告』2(11): 70-75。

白井光太郎(神風山人)

1887b「コロボックル果シテ内地ニ住ミシヤ」『東京人類学会報告』2(13):145-147。

末成道男

1996「学会・協会・振興会の動向」ヨーゼフ・クライナー編『日本民族学の現在』pp.9-15. 東京:新曜社。

スター、フレディック(小谷凱宣訳・編)

1997「フレデリック・スターの「フィールド・ノート」1904—横浜〜北海道、北海道〜東京・横浜—」小谷凱宣編『欧米アイヌ・コレクションの比較研究』(文部省科学研究費補助金(1994〜1996年度)国際学術研究(学術調査)研究成果報告書)pp.133-160. 名古屋:名古屋大学大学院人間情報学研究科。

坪井正五郎

1886「太古の土器と比べて貝塚と横穴の関係を述ぶ」『人類学会報』1(1):11-14。

1887a「コロボックル北海道に住みしなるべし」『東京人類学会報告』2(12): 167-172。

1887b「コロボックル内地に住みしなる可し」『東京人類学会報告』2(14):167-17。

手塚 薫

2002「縄文土器からアイヌ文化へ」財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構編『海を渡ったアイヌの工芸—英国人医師マンローのコレクションから—』pp.19-23. 札幌:財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構。

出村文理編

2006『ニール・ゴードン・マンロー博士書誌—帰化英国人医師・人類学研究者—』札幌。

寺田和夫

1975『日本の人類学』東京:思索社。

トライデ、バーバラ

1993「ライプチッヒ州立民族学博物館アイヌ・コレクション」東京国立博物館編『アイヌの工芸』pp.35-37. 東京:東京国立博物館。

鳥居龍蔵

1903『千島アイヌ』東京:吉川弘文館。

バチェラー、ジョン

1905『アイヌ語・英・和辞典及アイヌ語文典』(第2版)東京:教文館

ピウスツキ、ブロニスワフ

1906「樺太アイヌの状態」『世界』26: 57-66、27: 42-49。

ヒッチコック、R.(北構保男訳)

1985『アイヌ人とその文化—明治中期のアイヌの村から』(世界の民族誌I) 東京:六興出版。

村崎恭子

1988「金田一京助 — 詩情豊かな言語学者—」綾部恒雄編『文化人類学群像3 日本編』pp.145-165. 京都:アカデミア出版会。

吉岡郁夫・長谷部学

1993『ミルンの日本人種論—アイヌとコロポクグル—』東京:雄山閣出版。

吉上昭三

1987「ブロニスワフ・ピウスツキ、北海道以後—シェロシェフスキの記述を中心に—」加藤九祚・小谷凱宣編『ピウスツキ資料と北方諸民族文化の研究』(国立民族学博物館研究報告別冊5号)pp.81-97. 大阪:国立民族学博物館。

和田 完

1999「まえがき —ブロニスワフ・ピウスツキとの出会い」和田完編著『サハリン・アイヌの熊祭 — ピウスツキの論文を中心に』pp.i-x. 東京:第一書房。

和田完編著

1999『サハリン・アイヌの熊祭—ピウスツキの論文を中心に』東京:第一

書房。
渡瀬荘三郎
1886「札幌近傍ピット其他古跡ノ事」『人類学会報告』1(1): 8-11。

(欧文)
Batchelor, John
1882 "Notes on the Ainu" *Transaction of the Asiatic Society of Japan* 10: 206-219.
1892 The Ainu of Japan. London: Religious Tract Society.
1901 *The Ainu and Their Folk-Lore.* London: Religious Tract Society.
Hitchcock, Romyn
1892a "The Ancient Pit-dwellers of Yezo" The Report of National Museum for 1890, pp.417-427, Washington, DC: Smithsonian Institution, United States National Museum.
1892b "The Ainos of Yezo, Japan" The Report of National Museum for 1890, pp.429-502, Washington, DC: Smithsonian Institution, United States National Museum.
Milne, John
1882 "Notes on the Koro-poku-guru or Pit-dwellers of Yezo and the Kurile Islands" *Transactions of the Asiatic Society of Japan* 10: 187-198.
1893 "Notes on a Journey in North-east Yezo and across the Island. Appendices: Anthropological Notes" Supplementary Papers of the Royal Geographical Society" 3: 479-516.
Munro, Neil Gordon
1962 *Ainu Greed and Cult.* London: Routridge and Kegan Paul.
Piłsudski, Bronisław
1909a "Die Urbewohner von Sachalin" *Globus* 46(2):325-330. (ブロニスワフ・ピウスツキ著、和田　完訳「樺太の原住民」『北アジア民族学論集』5:23-34。)
1909b "Der Schamanismus bei den Ajnu-Stämmen von Sachalin" *Globus* 45(5):72-78. (ブロニスワフ・ピウスツキ著、和田　完訳「樺太アイヌのシャーマニズム」『北方文化研究報告』16:179-203。)
1912 *Material for the Study of the Ainu Language and Folklore.* Kraków: Polska Akademia Umiejętności.
Torii, Ryuzo
1919 "Etudes Archeologiques et Ethnologiques: Les Ainou des Iles Kouriles" Journal of the College of Science, Imperial University of Tokyo 42:1-337.